平成23年度文化庁埋蔵文化財保存活用整備事業

# 見る！触る！学ぶ！
# 石製品編

山梨県埋蔵文化財センターでは収蔵庫内の膨大な資料の再整理を行い、学校などでの地域学習に役立て、埋蔵文化財の積極的な活用を進める「埋蔵文化財学習活用事業」を平成17年度より文化庁の補助金を受けて実施しております。

昨年度までに土器、木製品、金属製品を整理し、平成23年度は石製品を取り上げ、体験学習用の復元品や貸出キットの作成などの事業を行っております。

再整理された実物資料などの活用を通して、歴史を身近なものとして興味・関心を持ち、自分のたちの住んでいる地域を誇りに思っていただければと思います。

大月市塩瀬下原遺跡　1号敷石住居跡

山梨県埋蔵文化財センター

## 石器とは・・・

石器は、人類の歴史の中で最も古くから使われてきた道具の一つで、石を素材として、石のもつさまざまな魅力（鋭さ、重さ、加工のしやすさ、色など）を利用して作った道具の総称です。

ここでは、山梨県内の旧石器時代～弥生時代の遺跡の発掘調査で発見された石器について紹介します。

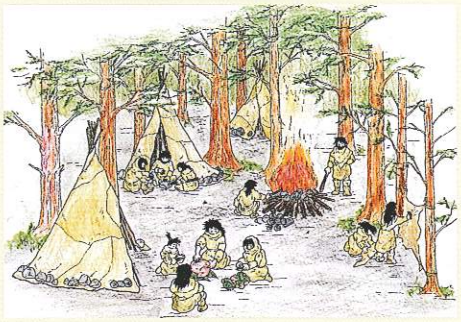
## 石器が使われた時代

500 万年ほど前から始まるとされる人類の歴史の中で、アフリカで見つかった約 250 万年前の石器が現在のところ最も古いものと言われています。日本では、約１万２千年より古い時代を旧石器時代と呼び、これより新しい時代を縄文時代、弥生時代の順で呼んでいます。弥生時代には金属製品も使われましたが、まだ石器も使われていました。

## 日本で石器の使われた時代

### ●旧石器時代〔後期旧石器時代（約 3 万年～約 1.2 万年前）〕

私たちのように一か所に定住するのではなく、簡単なテントのような家に住み、石で作った道具（石器）を持ち、気温が現在よりも低く、現在は絶滅しているナウマンゾウやオオツノジカなどの大型動物の獲物を追って移動しながら生活していたと考えられています。弓矢や土器は、まだ作られていませんでした。県内では立石遺跡（甲府市）や横針前久保遺跡（北杜市長坂町）、一杯窪遺跡（都留市）の発掘調査で出土した石器から、およそ 3 万年前頃には、人々が生活しはじめたことがうかがえます。



### ●縄文時代〔約 1.2 万年前～約 2300 年前〕

地面を掘りくぼめた竪穴住居に住み、定住するようになり、県内各地にも集落が営まれました。ドングリ類などの植物も有効に食べられるようになりました。住居の中には料理や、暖房・照明のために火を焚く炉が作られていました。この時代には石器に加えて土器が出現します。土器は容器としてだけでなく、火にかけることのできる器として食物調理の幅を広げ、当時の食生活を多様にしました。

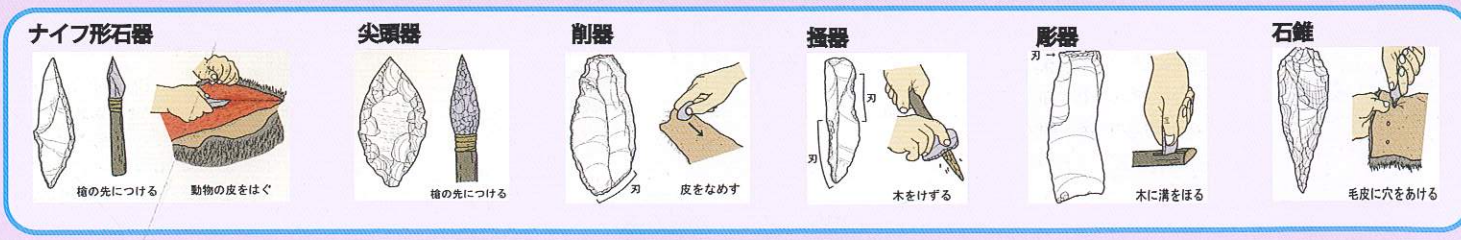
### ●弥生時代〔約 2300 年前～約 1700 年前〕

全国で米作りが行われるようになり、県内でもこの頃の水田が発掘調査で確認されています。中国大陸や朝鮮半島から米作りと一緒にいろいろな技術が伝わり、新しい形の石器も全国的に広がり、米作りとともに生活の道具にも変化が起こりました。まだ石器も使われましたが、次第に金属の材料が使われるようになりました。

## 旧石器時代の石器　～尖頭器の登場！～

狩猟具としてナイフ形石器の一部や尖頭器、加工具としてナイフ形石器、削器、掻器、彫器、石錐などがあり、用途が明らかでないものも存在しますが形態や使用痕などの研究を参考に使い方を推定しています。木の柄につけて投げ槍とし、大型動物の狩りに使われた尖頭器の登場は、狩猟に大きな進歩をもたらしました。横針前久保遺跡では、県内で最古の局部磨製石斧も発見されています。また、南部町天神堂遺跡では、こぶし大の石を数十個集めた礫群が発見され、焼けていたり、黒く焦げていることから、石蒸し焼き料理に使われたと考えられています。

天神堂遺跡出土礫群



## 縄文時代の石器　～弓矢の登場！～

旧石器時代に狩猟対象となっていた大型動物が、縄文時代に入る１万２千年前頃から、寒冷だった気候が急速に温暖化し、それに伴い動植物相も現在に近いものへと変化していきました。こうした時期に日本では土器がつくられ、縄文時代が始まります。縄文人は、環境の変化に適応できず絶滅した大型動物に代わって増えてきた、シカやイノシシなどの動きの早い中・小型の動物をとるために、飛び道具の弓矢を発明しました。矢の先に取り付けられた石器が石鏃です。漁労具しては、湖や川で漁労も行っており、網用の石錘や浮子などが見つかっています。工具としては、万能ナイフとして石匙が使われました。仕留めた動物の皮剥ぎや解体、また木や骨を削る等の機能があり、縄文時代の石器にしては珍しく、多機能型の道具といえるでしょう。旧石器時代に引き続き、木の伐採や土掘りのために石斧（石鍬）も作られています。動物の皮や骨などに孔を開けたりする細かな作業を行う道具としては石錐があります。縄文人にとって、野山の植物を採集することも大事な生業活動の一つでした。人々は、クヌギやナラなどのいわゆるドングリ類、また、トチノミやクリ、クルミやヤマイモなどを採っていました。これらを食べるため、殻を砕いたり磨り潰したりする道具として、石皿や磨石、敲石がセットとして使われました。当時の生活に直結する実用の石器に加え、縄文人の精神世界を示す石器もあります。祭司的な性格をもつ遺物には石製のものが多く、石棒、独鈷石などが代表的です。北杜市金生遺跡では、石剣や独鈷石、石冠状石器、大小の石棒、ヒスイ製の垂れ飾り、土偶などがたくさん発見されており、縄文人が自然に感謝し、子孫の繁栄を願って、神に祈りを捧げた場所ではないかと考えられています。縄文人が身につけたと考えられる装飾具として、玦状耳飾りや首飾り（大珠、勾玉、垂飾など）などがあり、身を飾るという意味があっただけではなく、悪霊から身を守るお守り的な意味の方が強かったようです。

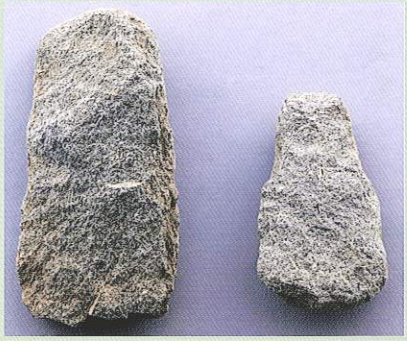
1

2

3

4

5


6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

1 尖頭器（南大浜遺跡）2 石鏃・3 石錘・4 石匙・5 石錐・6 打製石斧（天神遺跡）7 磨製石斧（中谷遺跡）8 石皿・磨石（上の平遺跡）9 石棒（金の尾遺跡）
10 独鈷石・11 石剣（金生遺跡）12 垂飾（上の平遺跡）13 玦状耳飾（天神遺跡・花鳥山遺跡）14 大珠（天神遺跡）15 大珠（頭無遺跡）

## 弥生時代の石器　～大陸系磨製石器の登場！～

石器は弥生人の生活のあらゆる場面に顔を出していました。この中には、縄文時代以前から変わらず製作されていた石器もあれば、新たに大陸から伝わったもの、金属製品の影響等を受けて変化したものがあります。大陸から弥生時代の初めに米作りとともに伝わったものには、太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石包丁などがあり、大陸系磨製石器と言われます。狩猟具としては、縄文時代の初めからある石鏃があり、米作りを始めた弥生人にとって、狩りによる食料獲得も、まだまだ大事な仕事でありましたが、弥生時代になると武器として用いられるものが多くなり、地域によっては大型化します。大型化により飛距離が減るものの、殺傷力が増し、集団間抗争の激化を物語る現象と捉えられます。中でも磨製石鏃は、弥生時代初めに大陸から伝わった武器で、磨製石剣とともに同種の金属製品の影響を受けながら大いに発達しました。漁労具しては、石錘などが見つかっています。農・工具としては、稲穂や稲株を刈り取るために使用された磨製の石包丁や粗製の剥片を利用した石包丁があります。木を伐採する工具としては、太くて重い磨製石斧（太型蛤刃石斧）があります。土掘りのための打製石斧（石鍬）も作られ、大型化するものもみられます。また、木を削ったり抉りを入れたりする加工作業用のための薄くて小さな斧（扁平片刃石斧）や中央に穴の開いた円盤状の環状石斧もあり、用途によって様々な斧を使い分けていたようです。紡織具としては、動植物の繊維を使い編物を作るため、糸を紡ぐ際には紡錘車という道具を使いました。中央の穴に糸巻きの棒を通し、おもりである紡錘車の回転による遠心力で繊維に撚りをかけ、糸巻き棒に糸を巻きつけます。編物用石錘は、ムシロなどを編む器具の付属品として使用される石のおもりと考えられている石製品で、多くは長さ 10～15 ㎝程度の細長い自然石を利用しています。砥石は、磨製石器や金属製品の研磨に使用されるものです。弥生時代の終わりごろ石器は県内の遺跡からその姿を消してしまいます。これには、大陸から金属器などの優れた道具が、新たに生活の中に入ってきたことが影響しているようです。

1

2

3

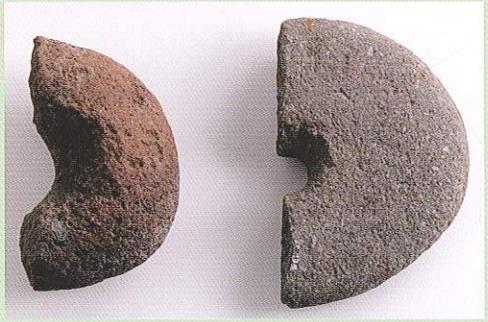
4

5

6

7

8


9

10

11

12

1 磨製石鏃（金の尾遺跡・油田遺跡）　2 磨製石剣（油田遺跡）　3 石錘・4 紡錘車（金の尾遺跡）　5 石包丁（平野遺跡）　6 粗製剥片石器（東山北遺跡）　7 打製石鍬（立石下遺跡）
8 大型蛤刃石斧・扁平片刃石斧（金の尾遺跡）　9 環状石斧（金の尾遺跡・油田遺跡）　10 編物用石錘（平野遺跡）　11 砥石（東山北遺跡）　12 砥石（平野遺跡）